

平成三十年度 岡山大学 国語

問題一

問一	ア	邪	魔	イ	狙	ウ	排	除	エ	設	オ	貢	献
問二	魅力的でないクジャクのおスは、自分の生存を犠牲にして、派手で無駄な形質に大きなエネルギーを使うということ。												
問三	効率よくエサをとり、効率よく成長するという経済性の観点からすると、長い羽と派手な模様は、飛びにくくなることと、捕食者に狙われやすいという点で、無駄であるということ。												
問四	メスは、繁殖を通じて健康で力強いオスの形質を後世へと引き継ぎたいという立場から、オスからのニセのシグナルを無視し、十分なエネルギーを蓄えて成長した派手な羽を有するオスのみを、自分の相手としてふさわしいと判断するということ。												
問五	成長や生存のために犠牲を払っていることを前提としたときに、コストをかけないシグナルは誰でもが発信できるものであり、コストをかけているシグナルは余裕をもって成長や生存ができていることを示し、魅力的なおスであることの信頼につながるということ。												

問題二

問一	A	川	B	びくびく
問二	家族の一員としてひとかたまりの連帯のなかに帰る意識であり、自分の居場所で確固とした存在でいられるという感覚。			
問三	久しぶりの帰省であったが、家は兄の代となり、彼はその家族の一員ではなく単なる客という存在であり、自分の生まれ育った家は他人の家となってしまうと痛感したから。			
問四	老婆は家族の意味を体現する存在であり、家族としての強いつながりを大切にし、帰って来る場所としての家族を信じ、離れていても家族としての思い出を大事にしてもらいたいという思いを伝えている。			
問五	見知らぬ老夫婦と親子として過ごした一夜のおかげで、東京の生家では味わえなかった家族のぬくもりや自分の原点を実感することができ、自分の確固とした存在基盤があることの重要性を認識しているという意味。			

平成三十年度 岡山大学 国語

問題三

問一	(1)	甚だしくはものをおっしゃいますな。		
	(2)	少しもものをおっしゃらない。		
問二	ア	殿	イ	乳母
			ウ	姫君
問三		エ	姫君	
問四	輿入れしてきたばかりの姫君の、鶯の鳴き真似をして酸茎を欲しがめる様があまりに情けなく思えたから。			
問五	乳母は姫君が口やかましく話す癖があるのを心配し、春の鶯のように愛らしく振舞うよう諭したが、姫君は忠告の真意を理解せずに、乳母の言葉通りに解釈し、鶯の鳴き真似をして酸茎を欲しがったこと。			

問題四

問一	A	使人	B	県令
問二	しよを えずんば あへて いふに かへらず。			
問三	部下に決して命令を軽んじないようにさせることがこのようにできる。			
問四	冬至を祝う賀状の返事をもらうまで決して帰らないと言いはる下級官吏の言動に対し、蘇子美は、このように強情で礼儀知らずな部下を持つ県令は無能であると評価し、蔣堂は、部下に命令を守らせることのできる有能な県令であると評価した。			